

シャトーブリアンの作品に表われた アメリカのエキゾティスムについて

近 藤 等

一 小説「アタラシ」の源泉論考

一、主題の源泉について

二、自然描寫の源泉について

一 主題の源泉について

北米の曠野を背景に、インディアンの青年シャクタスと、キリスト教徒を母として、インディアンの酋長を父とする乙女アタラシとの戀愛を取扱つたシャトーブリアンの小説「アタラシ」(一八〇一年刊)における源泉が問題とされるようになったのは、ジョゼフ・ペディエ教授が彼の勞作「エチユード・クリチック」(一九〇三年)の中で「最近の研究は疑をはさみ得ない事實を示した。彼の云つてよろこぶほど遠くへは、彼の旅行はなされなかつたのである」という注目すべき新事實を發表して以來のことである。

Chateaubriand en Amérique. Vérité et fiction

[Etudes critiques, Paris, Armand Colin, 1903, p 125~294]

ベディエ氏によれば、シャトーブリアンはワシントン大統領に迎えられ、ナイヤガラ大瀑布まで行き、新世界アメリカの光景をすばやくとらえることはできた。しかし、あれほどの輝かしい色彩をそなえた場所や、ミシシッピ河やフロリダ地方はつきり見ていないのである。描かれている場所は當時なお蠻地であるから、一步踏みこんだなら、インディアンのために彼は殺されたらうというのが第一の理由であり、次はシャトーブリアンの北米旅行の日程が問題にされている。あれだけ廣大なる土地を二年足らずの旅行では見終ることは不可能であるというのである。

以上の二つの理由から推察すると、シャトーブリアンはアメリカを一べつしただけで「アトラ」の光景を作り上げたことになる。博學なベディエの綿密な研究は信すべきものであり、彼の弟子たちや、シャトーブリアンの著名な研究者、カリフォルニア大學のシルベール・シナール教授は、シャトーブリアンのテキスト毎に、根氣よく、その「源泉」を探索してきた。その結果、ベディエの研究の正しさが證明され且さらに前進したものとなり、今日迄ベディエの研究をくつがえすような説は發表されてゐない。(Armand Weil 編, *Atala*, Edition critique, Librairie José Corti 1950 年による)

かくてこの源泉探求の結果、表面に浮び上つてきたのは、シャトーブリアンが「アトラ」を書くにあたつてその資料となした各種の作品であり、これは主として (I) アトラ以前に發表された他の小説作品、(II) 旅行者の紀行、この二種類に分類することができる。

次に「アトラ」とこれらの作品の類似點について検討してみることとする。

一 主題の源泉について

一八〇一年にアトラが出版された當時、すでに一部の批評家は、彼のいう主題の新しさなるものと、世に知られている幾つかの作品との間における類似點を指摘した者もあつた。M. J. シュニエは同年「アトラの著者は戀愛と宗教とを相戦わせることによつて、新しいイデーを考案し、極度な困難さに打勝つたと考えているようだ。しかしそのイデーが新しいものであるとは、どうして信じられようか？ 彼はもしかすると、ルノーとアルミードについて、ロジューとブラグマントについて、あるいはまたザイルの悲劇について知らなかつたのだ」と述べている。

M. J. Chénier *Les Nouveaux Saints*, Paris, Dabin an IX (1801)

また今一人の批評家カングネは「アトラの物語は、その根底ではヴォルテールのザイルと瓜二つであることを認める。アトラはザイルと同様に、異教徒に戀したキリスト教徒の女である。宗教と戀愛のいずれが勝つであろうか？ これが問題である」と書いてゐる。

(*Décade philosophique, littéraire et politique* du 10 floréal, an IX (30 avril 1801))

またモレル師は「この宗教と戀愛との闘いはすでにかなり多數の作品で取扱われた問題であり、これが新しい性格であるという話は奇妙だ。著者はこれらの闘いが、多くの眞實と深い興味をもつて描かれているエロイズとザイルを忘れてゐるのではないか？」と語つてゐる。

(Abbé Morellet : *Observations critiques sur le roman intitulé : Atala*, p. 50)

ところで、「アトラ」の作者が大きな影響を受けた人はルソーであることは疑いない。シャトープリアンは一八〇一年の序文ではこのことを否定しているが、彼の出發點はここにあるといわねばならない。シャトープリアンの處女作「革命について」は、後年シャトープリアンが自ら云つてゐることく、ルソーの讀書によつて養われた青年の作品であり、「新エロイズ」「エミール」などに對する思ひ出は、つねにルソーに對する賞讃の情を彼に抱かせていたの

であつて、自然の狀態と未開な生活の幸福に對する辯護とはアトラの根底に見出される思想であり、アトラの中には「人間不平等起源論」(一七五五)の中の理論と例證が含まれているのである。ルソーの作品の中に書かれているホッテンドット族の次の挿話は、*「アトラ」*におけるシヤクタスの身の上話と非常な類似が見出されるのである。

「希望岬におけるオランダ宣教師のすべての努力は、一人のホッテンドットをも改宗させることはできなかった。

岬の總督ファン・デル・ステルは、幼児の一人をキリスト教の方針とヨーロッパの風習によつて育てた。ぜいたくな服を着せ、幾つもの語學を習わせ、彼は著しい進歩をした。そこで總督は彼を印度に送り、ある商會で働かせた。しかし再び岬へ歸つてきた數日後のこと、仲間のホッテンドットを訪ねると、ヨーロッパの服を捨て、再び羊の皮に身をまとう決心をした。かくて、彼は昔の恰好をして、ヨーロッパの服裝をつつみ、要塞に戻り、總督に差しだしながら云うのであつた。*「どうぞ、この服裝を永久にまとうないことを決心しましたことをお許し下さい。私はまた、生涯キリスト教はあきらめようと思います。私の決心は私の祖先の宗教と、風俗習慣通りに生活することに決めました。唯一一つのおねがいは、あなたへの愛の印として、この首飾りと短刀とを身につけていることをお許しねがいたいのです」* 總督の返事も待たず、彼は逃げるようにその場を去り、二度と岬に姿を現わさなかつた」

右の話は、恩人ロベスの許を去つて曠野に歸る青年シヤクタスの物語と全く同じであることが分るであらう。

次にマルモンテルの小説「*レ・インカ*」を取上げてみると、「アトラ」の中のアトラとシヤクタスの戀はこの作品の中のオロンゾとコラの戀に比較し得るのである。これはジュール・ルメートルも指摘しているところであるが、その物語は次のようなものである。

スペインの青年オロンゾは、僧院に他の修道女たちと閉ぢこもつていたペルーの美女コラを、地震の際に誘拐し二人はアトラとシヤクタスのように孤獨の地にかけ落ちするのである。この小説においても戀と宗教との葛藤とが主題

になつてゐるが、青年オロンゾの戀の甘言にコラはわずかの抵抗しかみせず身を捧げるのである。しかし、この時から二人の前途には暗雲がたちこめる。自分の立場の重大さにコラが氣がついたのは、小鳥たちが眼をさましたその翌朝のことであつた。彼女は未練は感じるが、良心の呵責は感じない。

「おお、戀しいオロンゾ、あたしの心は引き裂かれてしまいました。あなたの心もやがてはそうなるでしょう。でも許して下さい。聖なる義務、おそろしい義務が私を鎖でつないでいるのです。その義務があなたの腕の中からあたしをもぎとつてしまうことでしょう。永遠の別れの時がやつてまいりました。両親は私を神様の祭壇に捧げ、私の忠誠を誓つたのです。両親の血は、私の誓いの保證なのです。背信し、脱走したあたしは、両親を苛責に追いこむことでしよう。あたしの罪は、彼らの頭上におおいかぶさり、その苦痛を荷負うことでしよう。掟とはこんなに苛酷なものなのです」

Marmontel : *Les Incens ou la Destruction de l'Empire du Pérou*, Paris, Lacombe 1777, tome second
p 36~37

この作品は外觀的にはアタラに類似しているが、コラは戀人の情熱に身を委ねたその翌日も、自分の犯ちに對しては後悔を感じはしない。ただ、彼女が逃走したことが知られた場合に家族にふりかかる影響が心配なのである。この點は、アタラの心にくりひろげられる内面的なドラマとはへだたりが大きい。シャトーブリアンがこの物語を利用したとするなら、この作品を宗教的なイデーによつて置き代えたとみるべきであらう。

このほか、當時のフランスではあまり知られていなかった幾つかのアメリカの作品のうちで「アタラ」と同じ主題を展開しているものがあつたが、就中一七九六年に作者不詳で出版された「アメリカ夜伽」(Veillées américaines)の中の短かい物語「オデライ」について、一八〇一年八月十五日發行の「ル・モニートル」誌は「アタラ」との類似點

を指摘している。その後なされたポール・アザールの研究によつてこの作品の著者は十八世紀末にアメリカに滞在していた博物學者バリン・ド・ボヴォアであることが證明され、アザールはさらにアトラとの類似點を明確にしている。

Paul Hazard: L'auteur d'Odérabi, *Revue de littérature comparée*, Juillet-septembre 1943)

また、ジローはこれより以前、一九一三年にこの作品がアトラにおよぼした寄與について論じている。

Victor Giraud, *Les Veillées américaines*, contribution à l'histoire d'Atala, *Revue bleue*, février 1913.

「オデライ」の詳しい表題は「Odérabi, Histoire américaine, contenant une peinture fidelle des habitans de l'Amérique septentrionale. A Paris, chez Boiste, Richard, Desenne」であるが、「アトラ」の出版後、「アトラ」の好評に乗じて再刊されたこの作品の表題の下には「オデライはアトラの姉である」というサブ・タイトルがつけ加えられていた。そして出版者は「この作品は、十八世紀にカナダ國境でインディアンインディアンの捕虜となつた一フランス人が書いた手紙を再成したものであり、この作品もまた未開人の小屋の中で構成されたものである」と説明を加えている。

この物語の女主人公オデライはインディアンインディアンの娘であり、オンテレを開放するのであるがウルトラ・ロマンティックであり、ウルトラ・エキゾチックな作品である。

青年オンテレは戀人ユー・ジュニーとの結婚を彼女の父親が許さないのので、アメリカで一旗あげ、彼女を妻に迎えるための財産ができた上で歸國し、結婚を申しこもうという夢のある男だつたが、鳥打ちにでかけている時、道に迷い、友人たちはみな「森の男たち」に殺害される。辛うじて彼は逃げたものの、やがてほかの未開人の手中に落ちてしまふのである。そして棒杭に結びつけられるのであるが、このあたりのところは「アトラ」の場合ときわめて類似している個所が數ヶ所あるが、そのうち最も明瞭なものを二つ引用してみよう。

Cependant on m'avait étendu sur le dos; des cordes pourtant de mon coup, de mes pieds, de mes bras, all-

aient s'attacher à des piquets enfoncés en terre. Des guerriers étaient couchés sur ces cordes ; et je ne pouvais faire un mouvement sans qu'ils en fussent avertis. (Atala)

次に「オデライ」では以下の通りである。

Lorsque la lune parut derrière les montagnes, ils me portèrent à terre, m'attachèrent les pieds et les mains à quatre pieux ; une lanterne passée autour de mon col était tenue par plusieurs Indiens, en sorte qu'il m'était impossible de faire quelque mouvement sans les réveiller tous.

やがて一行は村に到着し、オンテレは火あぶりじやれることになり、その仕度をさせられる。

Aussitôt on me couronne de fleurs, on me peint le visage d'azur et de vermillon, on m'attache des perles au nez et aux oreilles et l'on me met à la main une chichikoué.

次に「オデライ」では以下の通りである。

Ces nouveaux ennemis posèrent sur nos têtes des couronnes de plumes, nous harpouillèrent le corps de rouges et blanc, nous mirent dans les mains des bâtons recouverts de peaux de cygne, et nous firent passer entre deux haies de femmes qui nous accablèrent de coups

この時、美しい娘が現われてオンテレを助け、父の小屋に招じ入れ、傷の手當をする。かくて彼は、その家の養子となるのである。しかしヨーロッパ人のオンテレは、故國にいる恋人ユージュニーのことが忘れられず、メランコリックな日々を送るのである。オデライは彼をなぐさめ、結婚しようと申し出るがオンテレはユージュニーをうらぎる氣持にはなれない。とかくするうちにオデライは死にオンテレは一人になつて哀愁にみちた日々を過しながら死ぬ日待つのである。

「アトラ」の中の若き日のシャクタスは「オデライ」の中のオンテレに、老いた日のシャクタスはオデライの父親ウラウの中に、オーブリ神父は哲人ナドーエシの中に、そしてアトラは戀に失望して毒を飲んで死ぬオデライの中に認めることは容易である。

シャトーブリアンのルネのように、オンテレはアメリカの原始林と、未開人の天幕の下に不治のメランコリーを持ち運んだのである。ルネと同じように、彼はビトレスクな絶望を抱き、旅人の衣を身にまとい、己の涙を大河の波に混ぜている。ルネのように彼は世紀病にとりつかれ、あまりにも強い想像と感受性に苦しんでいる。オデライはアトラとともに、シャトーブリアンの長篇「レ・ナツチェズ」の中でルネが兄弟愛しか感じないミラにより近い存在とみるべきであり、この二つの作品はイデーといい、テーマといい、あまりにも共通點が多いようである。

オンテレの心は可なり複雑であり、彼はたえずフランスに残してきた可哀想な女性のイマージュにとりつかれている。そしてオデライが與える單純な幸福では満足しきれないのである。われわれは彼のうちに、自分を未開人に戻そうとする文明人、しかもその思い出や習慣からぬけきれない男の姿をみるのである。彼はたとえイリノアの戦士の服裝をまとい、インディアンのように刺青をしても、その心は變らないのだ。彼がその時まで過してきた環境とは全く異なつた場所に突然移されても、彼はその環境に適合することはできない。これは「レ・ナツチェズ」の中のルネの場合も同じことがいえるのであり、ルネはアメリカを忘れようとするが、彼の廻りのインディアンたちが營んでいる單純な生活に飽いてしまうのである。

このテーマは「オデライ」の中にその芽生えを認めることができるのであつて、何をもつてしても憩わせることができない、この感受性の強い男の心の葛藤、獨立への愛、未開人たちの自由な生活に對するあこがれ、しかもこれまでの文明生活に對する哀惜、これこそシャトーブリアンのアメリカを舞臺にとつた小説の根底に見出される感傷的エ

キゾティスムの主要な要素なのである。

この「オデライ」の他に一七八九年の *American Museum* 誌上に發表された「アザキア、カナダの物語」(*Azania, a Canadian Story*) がアタラの源泉となつた外國小説であるとみなされていたが、グニエル・モルネの研究により、この作品は一七六五年、ラ・ディックスメリによつて出版された哲學的、倫理的物語」(*Contes philosophiques et moraux*) におさめられた中篇小説の翻譯であると指摘されている。

以上の作品の他にシャトーブリアンが影響をうけたものに「ボールとヴィルジニー」がある。しかしこの作品は「アタラ」の源泉となつたというよりも、シャトーブリアンに影響をおよぼした作品として扱われるべき性質のものであるので、この源泉の所では論じない。

次に「アタラ」の自然描寫の主要な源泉となつた作品、シャトーブリアンが、彼の直接的調査の不十分な點を補うために参照使用したフランスおよび外人の旅行者の著作について、その中に書かれている自然描寫を「アタラ」の自然描寫と對照しながら検討をすすめる。

二 自然描寫の源泉について

シャトーブリアンが「アタラ」を書きあげるにあたつて、その自然描寫の源泉として使用した作品の中の實際の個所を「アタラ」のテキストと比較し、實證する前に、それらの主要作品の著者と作品そのものについて最初に解説を加えておくこととする。

【 シャルルヴォア神父とその著

シャルルヴォア神父に關してはシャトーブリアンは彼の「文學雜考」(*Mélanges littéraires* XXI) の中に述べつ

るが、一七二〇年から二二年にかけて聖ローレンス地方とミシシッピ地方を跋渉し、その國土、住民、風習を研究した人で、これらの觀察をまとめて發表したのが「新フランスの歴史と紋景」である。

Père de Charlevoix : Histoire et description générale de la Nouvelle France, avec le Journal historique d'un Voyage fait par ordre du Roi dans l'Amérique Septentrionale, Paris, chez D. F. Giffart, 1744, 3Vol, in 40) である。

シャトーブリアン自身、その著「キリスト教の精神」「アメリカ紀行」の中でたびたび彼の名と作品を引用し、「レ・ナッチェズ」の序文では「ナッチェズの構造の根底となつてゐる歴史的事件はシャルルヴォアの中に讀むことができる」と書いている。未開人たちの風俗習慣、宗教、祭禮に關する記述の多くがシャルルヴォアに負うてゐることは後述する。

Ⅱ ウィリアム・バートラムとその著

シャトーブリアンは「レ・ナッチェズ」(XX)の中で「シャルルヴォアだけが自分が参照した唯一の歴史家であり旅行者ではない」と書いているごとく、彼以前にフロリダ地方を旅行し、シャトーブリアンがフィラデルフィアを通過したその年、すなわち一七九一年、フィラデルフィアで旅行記を發表したアメリカの探検家であり博物學者であるバートラムの作品を等閑に附することはできなかった。この作品 William Bartram : Travels through North and South Carolina, East and West Florida, the Cherokee country, the extensive territories of the Muscogulges, or Creek Confederacy and the country of the Chactaws, Containing an account of the soil and natural productions of those regions; together with observations on the manners of the Indians, Philadelphia 1791. この佛譯は一七九八年にバリーで出版されたが、シャトーブリアンは原書を直接に参照したものである。シャトーブ

リアンは「アメリカ紀行」の中でバートラムを参照したことを次のように告げている。

「ルイジアナの描寫の直後に、ナッチェズの原稿の中には、私が可なり入念にやつたバートラムの旅行記からの拔萃がつづく。これらの拔萃には、私自身の修正や、觀察、反省、附加、個人的な描寫などが混合している。そして私の仕事の中では、そうしたものがもつれ合っているので、どれが私のものであり、いずれがバートラムのものであるかを識別することはほとんど困難である」

事實バートラムは著術家としても一流の人であつた。彼は奇妙な事實や、單なる地方的植物や動物に關するものではなく、シャトーブリアンに藝術的な印象、新しい幻想、大きなタブローを提供し得たのであり、ベディエは彼についてこう書いている。

「アトラの源泉を提供したバートラムは詩人である。幻術を心得た競争者シャトーブリアンにくらべては、その表現は貧弱ではあるが、かの熱帶の自然と、フロリダの僻遠の地に異常な新しさと光彩を與えている」(エチユード・P261) 彼の紀行の中にはシャトーブリアンが「アトラ」の中に使用したエキゾチックな鳥類や魅力的な植物の名が列記されている。またシミノール族のポートルート、會議の建物、アラシュアの大草原、森の中の嵐などの描寫がみられ、シャトーブリアンの模倣は「アトラ」のプロローグのメシヤスベ河の描寫からはじまつているが、このことについては後述する。

■ カーヴァー、イムレイ、その他

シャルルヴォア、バートラムの紀行とともにわれわれはカーヴァーのものを附加する必要があることは、シャトーブリアン自身「キリスト教の精神」Ⅹおよび XIV (Les voyages de Carver dans le Canada) の中びんごんを述べている。カーヴァーの著書は一七七八年にロンドンで出版された。そのタイトルは Carver's Travels through the

interior parts of North America, in the years 1766, 1767 and 1768 である。佛譯は一七八四年ペリーで出版された *Voyages dans les parties intérieures de l'Amérique Septentrionale*, pendant les années 1766, 1767 et 1768 である。

カーヴェーからの借用は「アタラ」のプロローグの中のミシシッピー河の兩岸のコントラストを比較するところからはじめてゐる。また風俗習慣の描寫について多くの教示をうけてゐる。

次にイムレイがある。彼についてミヤトブリアンは「キリスト教の精神」(M および IX) の中で書いてゐるが、その著書は *A Topographical description of the Western Territory of North America*, London, 1792 である。ミシシッピー河の描寫について多くを負つてゐる。

以上解説した作品はミヤトブリアン自身が擧げてゐるものであるが、その他「アタラ」の作者が参考に使用したものは、つねにミヤトブリアン研究者によつて其のほとんどを知られてゐる。

1), Baron de Lahontan : *Nouveaux voyages de M. le baron de Lahontan dans l'Amérique Septentrionale* (La Haye, 2 vol, 1703), 同じく *Dialogues curieux entre l'auteur et un Sauvage de bon sens qui a voyagé* (La Haye, 1 Vol, 1703)

2), Père Lafitau : *Moeurs des Sauvages Américains, comparés aux mœurs des premiers temps*

3), Le Page du Pratz : *Histoire de la Louisiane contenant la Découverte de ce vaste pays; sa Description géographique; un Voyage dans les Terres; l'Histoire Naturelle, les Mœurs, Coutumes et religion des Naturels, avec leurs Origines*.....(Paris, de Bure, 1758, 3 vol)

4), Marc Catesby : *The Natural history of Carolina, Florida and the Bahama Islands. Containing the*

Figures of Birds, Beasts, Fishes, Serpents, Insects and Plants.....together with their descriptions in English and French..... Histoire Naturelle de la Caroline, de la Floride et des Iles Bahama, contenant les desseins des Oiseaux, des Animaux, des Poissons, des Serpents, des Insectes et des Plantes..... avec leurs descriptions en François et en Anglois.

以上の作品のうちラオンタンの名はシャトーブリアンの「死後の回想」第一巻の中に、またラフィット神父のことは同じく第一巻、および「革命論」の中に引用されている。

次に實際のテキストについて「アトラ」と以上列挙してきた作品の比較検討に進むこととする。

小説「アトラ」のプロローグは、ミシシッピー河の叙景からはじまり、小説の最後はナイヤガラ瀑布の叙景という二つの廣大な自然描寫によつて縁取られている。

「その昔、フランスは北アメリカに廣大な領土を所有していたが、それはラブラドルからフロリダに及び、大西洋の海邊から上カナダの最も奥まつた湖水にまで及ぶものであつた。

同じ連山中に源を發する四條の大河がこの果てしない地域を分けていた。東に流れて同じ名の灣に注ぎこむセント・ローレンス河、その水を名も知れぬ海へもたらす西の河、南から流れて北に走りハドソン灣に流れるブルボン河、北から南下しメキシコ灣におちるミシヤスベ河(ミシシッピーまたはミシヤシッピーとよばれるものの本名ハシャトーブリアンの註V)がそれらの河である。

この最後の河は、千里を超えるその流れの中にあつて、合衆國の住民が「新しき樂園」とよび、フランス人たちがルイジアナという懐しい名を残した風光明媚な地方をうろおしている。メシヤスベ河の支流をなすミズーリー、イリノイス、アカンソー、オハイオ、ワバッシュ、テネッシーなどの他の多くの河は、その泥土をもつて土地を肥し、河水で地味を豊かにするのである。」

この一節の主要な要素は、シャトーブリンの「アメリカ紀行」の中にそのまま見出されるが、シャトーブリアン自身のもではなく、カーヴァーの次の二つのパッサージュを合せたものと考えられる。

「この廣大な大陸の中心部附近において、四つの大河は、それぞれわずか數里へだたつたところにその源を發している。ヘドソン灣に流れこむブルボン河、サン・ローラン河、太平洋にその水をそそぐミシシッピー、オレゴンの別名西の河……」(カーヴァー、イントロダクションIX)

「北アメリカの主要な四つの河、つまりサン・ローラン河、ミシシッピー、ブルボン河、オレゴンまたは西の河は、その源をかなり區域の狭い小さな土地のなかにとつてゐる……これらの河の源から、北のヘドソン灣、また西のアムン海峽、または太平洋までは少くとも二千里の距離がある」(カーヴァー四七頁)

La France possédait autrefois dans l'Amérique septentrionale, un vaste empire qui s'étendait depuis le Labrador jusqu'aux plus reculés du haut Canada.

Quatre grands fleuves, ayant leurs sources dans les mêmes montagnes, divisaient ces régions immenses : le fleuve Saint-Laurent, qui se perd à l'est dans le golfe de ce nom ; la rivière de l'ouest, qui porte ses eaux à des mers inconnues, le fleuve Bourbon, qui se précipite du midi au nord dans la baie d'Hudson ; et le Meschacébé, qui descendant du nord au midi, s'ensevelit dans le golfe du Mexique.

Ce dernier fleuve, dans un cours de plus de mille lieues arrose une délicieuse contrée que les habitants des Etats-Unis appellent le nouvel Eden, et à qui les Français ont laissé le nom de Louisiane. Mille autres fleuves, tributaires du Meschacébé, le Missouri, l'Illinois, l'Arkansa, l'Ohio, le Yabache, le Ténase, l'engraissent de leur limon, et la fertilisent de leurs eaux.

(Atala)

“La source des quatre grands fleuves qui prennent naissance à quelques lieues seulement les uns des autres, vers le centre de ce vaste continent ; savoir, la rivière Bourbon qui se jette dans la baie de l’Hudson, celle de Saint-Laurent, le Mississipi et l’Orégon ou la rivière de l’ouest qui se verse ses eaux dans la mer Pacifique”

“Les quatre principaux fleuves de l’Amérique septentrionale, à savoir le fleuve Saint-Laurent, le Mississipi, la rivière Bourbon, et l’Orégon, ou la rivière de l’ouest, prennent leurs sources dans un petit espace de terrain assez circonscrit…… Du lieu de leurs sources à la baie de Hudson au nord, et au détroit d’Anian ou à la mer Pacifique à l’ouest, il y a au moins deux mille lieues.” (Carver)

これに引きつづく次の叙景はバートラムとイムレイに負うているように考えられる。

「これらの河が、冬の洪水で水嵩を増し、嵐が森を根こそぎにすると、引抜かれた樹木はみなかみに集まる。やがてそれらの樹木には水底の泥がべつとりとくつつき、蔦がからみつき、植物が八方に根をはつて、この残骸を堅固にかためあげてしまうのである。また泡立つ浪に運ばれてメシヤスベ河に流れこめば、河はこれをわがものとしてメキシコ灣に押し流し、砂洲にうちあげては、その河口の數を増して行くのである。時たま、河は山岳を通りぬけながら聲をはりあげ、溢れる河水を立ならぶ森の樹々や、ピラミッド型のインディアン岬のまわりに氾濫させてゆく。これこそ曠野のナイル河である。しかし自然の風景には、壮大さと優美さとがつねに結びついている。流れの中央は、松やかしの木の残骸を海へと押し流すが、岸に沿つて溯る兩脇の流れの上には、ビスチアや睡蓮の浮島が浮び上つて

いるのが見え、その上には黄色の花が小さな旗のように立っている。緑の蛇、青鷺、紅鶴、鰻の子などがこの花の船に旅人として乗りこみ、この移民船はその金色の帆を風にはらませて、とある奥まつた入江に眠るようにすべりこんで行くのである。」

この部分の前半はイムレイに負うていることは次のイムレイの一文を読めば明白である。

「流れのために開かれたこれら狭い水流のたいがいものに交叉している砂洲は、小川が運んできた樹木によつてその数を増している。枝や根がつかえて、浅いところに止まつてしまうような木があれば、それは無数の他の木を引止め、同じ場所にすえつけるのに十分である。人間の力をもつては、これらの木を引抜くことはできない。なぜなら、河が運んできた泥土がこれらの木をくっつけ、一緒に固めあげてしまうからである。十年足らずのうちに、そこには葦や灌木がはえ、岬や島をつくり、河床を変えてしまうのである。ラ・サールがミシシッピーを海まで下つた頃、この河の河口が今日のものとは非常に異なつていたことは確かだ。ミシシッピーの年毎の洪水が附近の岸邊の表面を蔽う泥土は、ナイル河の泥土に比較し得るであろう」(イムレイ四〇四頁)

後半は左記のバートラムの文に負うていることはベディエ(二六五頁)が指摘している通りである。

「私はその日、早くから帆船をくりだし、非常に奇妙な水生植物である、すいべつ屬のビスチアをたくさん見た。それらは漂う小島となつてゐるが、あるものは非常に大きく、風や水のまにまに漂い流れていた……大雨や大風が川水をにわかには高めるようなことになる、これらの漂う小島が岸邊からいくつも離れる。そしてこうした動く島は世にも愛すべき光景となる。それらは自然の最もつましい産物にすぎないが、人の想像を亂し、裏切るものである。これらの花咲ける原の只中に、風のためなぎ倒された古い木の根や灌木の姿が眼にうつり、そこには鰻、蛇、蛙、川獺、鳥、鷺、クルソス、シユカなどが住んでゐるにおよんではまつたく幻影そのものである」(バートラム第一卷一六

Quand tous ces fleuves sont gonflés par les déluges de l'hiver; quand les tempêtes ont abattu des pan^s entiers de forêts; le temps assemble sur toutes les sources, les arbres déracinés. Il les unit avec des lianes, il les cimente avec des vases, il y plante de jeunes arbrisseaux, et lance son ouvrage sur les ondes. Chariés par les vagues écumantes, ces radeaux descendent de toutes parts au Meschacébé. Le vieux fleuve s'en empare, et les pousse a son embouchure, pour y fermer une nouvelle branche. Par intervalle, il élève sa grande voix en passant les monts, et répand ses eaux débordées autour de la colonnade des forêts, et des pyramides des tombeaux indiens : c'est le Nil des désert. Mais la grâce est toujours unie à la magnificence dans les scènes de la nature : et tandis que le courant du milieu entraîne vers la mer les cadavres des pins et des chênes; on voit sur les deux courants latéraux remonter, le long des rivages, des îles flottantes de Pistia et de Nénuphar, dont les roses jaunes s'élèvent comme de petits pavillons. Des serpents verts, des hérons bleus, des flammans roses, de jeunes crocodiles s'embarquent passagers sur ces vaisseaux de fleurs et la colonie déployant au vent ses voiles d'or, va aborder, endormie, dans quelque anse retirée du fleuve.

(Atala)

The bars that cross most of these small channels, opened by the current have been multiplied by means of trees carried down with the streams; one of which stopped by its roots or branches, in a shallow part, is sufficient to obstruct the passage of a thousand more, and to fix them at the same place.....No human

force being sufficient for removing them, the mud carried down by the river serves to bind and cement them together.....In less than ten years, canes and shrubs grow on them, and form points and islands, which forcibly shift the bed of the river.....It is certain that when La Salle sailed down the Mississippi to the sea, the opening of that river was very different from what it is at present.....The slime which the annuals floods of the river Mississippi leave on the surface of the adjacent shores may be compared with that of the Nile. (Imlay)

“Je remis de bonne heure à la voile, et je vis ce jour-là de grandes quantités de pistia stratiotes, plante aquatique très singulière. Elle forme des îles flottantes dont quelques-unes ont une très grande étendue et qui voguent au gré des vents et des eaux.....Quand les grosses pluies, les grands vents font subitement élever les eaux de la rivière, il se détache de la côte de grandes portions de ces îles flottantes. Ces îles mobiles offrent le plus aimable spectacle : ils ne sont qu'un amas des plus humbles productions de la nature et pourtant ils troublent et déçoivent l'imagination. L'illusion est d'autant plus complète qu'au milieu de ces plaines en fleurs, on voit des groupes d'arbrisseaux, de vieux troncs d'arbres abattus par les vents et habités et peuplés de crocodiles, de serpents, de grenouilles, de loutres, de corbeaux, de hérons, de courlis, de choucass.

(Bartram)

シャトリブリアンの筆はさういへく

「だが、何人がメシヤスベの風光を描き得ようか？ 河口からオハイオ河の合流點に至るまで、流れにのつれて世に

も珍らしい光景がつづくのである。西岸では、大草原が目路もはるかに擴がり、その緑の波は、遠ざかりつつ紺青の空に達し、そこで消え行くように思われる。時たま年老いた野牛が波をわけて泳ぎながら、メシヤスベ河のとある小島の丈高い草むらに寝ころびにくることがある。三日月型の二本の角のついた額、古びて泥まみれになつたその頤髯をみれば、廣々とした河の流れと、岸邊の野性のままの肥沃さに満足した眼差しを投げかける河の神とみまがうであらう。

これが西岸の光景であるが、對岸では趣を變え、互にすばらしい對照の妙をなしている。流れの上にかかり、岩や山の上に群をなし、谷間に散在する千種萬態の樹々は、ありとある色彩と香を呈し、互に交り合い、共生し、眼も及ばぬはるかな空に聳えている。」

この風光の主要な輪廓は左記のイムレイに負うている。

「眼ははるか遠くを眺めながら、銀の河の丘陵の斜面に、美しい美を見出すのである。丘陵は斜に北西に廣まりながら次第に高まり、ついにはその光り輝く頂は見えなくなつてしまうのである。」(イムレイ三四頁)

次に兩岸の風光のコントラストについてはカーヴァーの中にその比較を見出したのである。

「この河は、その兩側に多數の山々を流れに沿うてずうっと持つてゐる。これらの山は時には近づき、また時にはいちじるしく離れる。これらの山々の間の土地は一般に草で蔽われていて、ところどころ木の茂みが散在し、その近くでは、鹿や大角鹿の群が廣々とした孤獨の地でしずかに草を食んでゐる。廢墟の塔のごとき岩のピラミッドがおちこちに見られ、また他の場所ではおそろしい懸崖がみえる。そして何よりも注目すべきことは、流れの一方がこのような様相を呈しているのに反し、反對側はその頂まで、げにも美しいみどりで蔽われていることである。ここでは、美しさと擴がりとは、イマジネーションが想像し得る尺度をまつたく超越した眺めを楽しむことができるのである。み

どりの野、果物で蔽われた牧場、數多くの島、それらすべてが變化に富んだくるみ、楓、豊かな房をつけたぶどう、果實の重荷でつぶれそうになつた梅の木などの果樹でみちているのを眼に描いてみていただきたい。またこの豊かな光影が、さらに眼路をはるかに堂々と流れ行く見事な大河の遠景によつて一段と引立つてゐるのを想像されたい」(「カーナー」三二頁)

Mais qui pourrait peindre les sites de Mescnacébé ? Depuis son embouchure jusqu'à la jonction de l'Ohio, le tableau le plus extraordinaire suit le cours de ses ondes. Sur le bord occidental, des savanes se déroulent à perte de vue : leurs flots de verdure, en s'éloignant, semblent par une progression insensible, monter dans l'azur du ciel, ou ils s'évanouissent. Quelquefois un bison chargé d'années, fendant les flots à la nage, vient se coucher parmi les hautes herbes dans une île du Mescnacébé. A son front orné de deux croissans, à sa barbe antique et limonneuse, vous le prendriez pour le dieu mugissant du fleuve, qui jette un coup d'oeil satisfait sur la grandeur de ses ondes, et la sauvagerie abondance de ses rives.

Telle est la scène sur le bord occidental : mais elle change tout à coup sur la rive opposée, et forme un admirable contraste. Suspendus sur le cours des ondes, groupés sur les rochers et les montagnes, dispersés dans les vallées, des arbres de toutes les formes, de toutes les couleurs, de tous les parfums, se mêlent, croissent ensemble, montent dans les airs à des hauteurs qui fatiguent les regards. (Atala)

The eye receding, finds new beauties in the rising hills of Silver creek, which, stretching obliquely to

the north-west, proudly rise higher and higher, as they extend, until their illumined summits imperceptibly vanish (Jmly, p. 34.)

“Ce fleuve a de chaque côté une foule de montagnes tout le long de son cours : et ces montagnes tantôt s'approchent, et tantôt s'éloignent considérablement. Le terrain entre ces montagnes est en général couvert d'herbes avec quelques bouquets de bois dispersés çà et là, près desquels on voit des troupeaux de cerfs et de lains qui puissent tranquillement dans ces vastes solitudes. En plusieurs endroits on aperçoit des pyramides de rochers qui ressemblent à des vieilles tours en ruines, dans d'autres on voit des précipices effrayants, et ce qu'il y a de plus remarquable, c'est que tandis qu'un côté présente cet aspect, le côté opposé est couvert de la plus belle verdure jusqu'à son sommet. On jouit là d'une vue dont la beauté et l'étendue surpassent tout ce que l'imagination peut se figurer. Qu'on se représente des plaines verdoyantes, des prairies couvertes de fruits, des îles nombreuses, le tout rempli d'une variété d'arbres fruitiers, comme des noyers, des érables à sucre, des vignes chargées de riches grappes et de pruniers succombant sous le poids de leurs fruits : qu'on se figure ce riche spectacle rehaussé par la perspective d'un superbe fleuve roulant majestueusement son cours aussi loin que la vue peut s'étendre.” (Carver)

次にシャトーブリファンの筆は植物から動物、小鳥におよんで行く。

「野ぶどう、のうぜんかづら、コロシントなどが、これらの樹々の根もとに生れ合い、小枝を乗り越え、梢のはしまで這いのぼり、楓から百合の樹へ、百合の樹からたちあがると身をのびし、無数の洞窟や、圓天井、廻廊を作

りあげている。樹から樹へとさまようこうした蔓草が、小流を横切つてその上に花の橋を架けることも珍らしくない。これらの茂みの真中から、木蘭はその悠然とした圓錐形の頭に、大きな白い花をつけて、森の王者として君臨しその間近で、緑の扇を軽くゆすぶっている棕櫚のほかに、これの右に出るものはないかのようなものである。

創造の神の手によつてこの寂寥の地におかれたおびただしい動物たちは、そこに歡喜と生命とをうちひろげている。並木道の端からは、ぶどうに酔つた熊が小楡の枝の上をよろめき渡つていゝや、馴鹿が湖水に水浴みしているのが見られる。黒い栗鼠は木の葉の茂みの中で遊び戯れ、アメリカつぐみや、雀ほどの大きさしかないヴァージニア鳩は、木莓で眞赤になつた草原におりてくる。黄色い頭をした緑色の鸚鵡、黄色の啄木鳥、眞紅な僧正鳥は、ぐるぐる廻りつつ糸杉をよじ登つていゝ。蜂雀はフロリダの素馨の上できらきらと輝き、鳥追蛇は樹々の圓屋根にぶらさがり、鳶のように身をゆすつて鋭い音を立てていゝ。」

以上の文章のうち最初の植物のところは、バートラムが彼の紀行の一三四頁で書いていゝ水邊の植物と多くの共通點が見出される。

次にくる鳥類についてはカテスバイの書物の中の美しい着色をほどこされた挿畫がシャトーブリアンの源泉となつたものである。事實、それらの挿畫の中にはシャトーブリアンが引用した鳥類がごとく原色で表わされていゝのであつて、挿畫と「アトラ」の敘述についてはシナル教授が綿密な比較を行なつていゝ。

ところで一八三二年に、ルネ・メルセースという一旅行者は、シャトーブリアンの描寫が眞正なものであるかどうかを確かめようとしてナイヤガラを旅し、ミシシッピー河を下つたが、その結果、「シャトーブリアンが述べていゝような岸邊の光景も、そこに遊びたわむれる鳥類や動物も認めることはできなかつた。『アトラ』の中のミシシッピーの描寫は、一度も實地に見たことのない者の手によつてなされたものである」といゝ意見を述べるに至つたのであ

る。

こうしたことが、そもそもベディエが「アトラ」の源泉探求に着手した一動機なのであるが、このメルセーヌの意見に對しては次のように云えるのではないだろうか。

シャトーブリアンが描いたミシシッピーの光景は、現在は勿論のことながら、このメルセーヌが旅した時には既に認められなかつたが、シャルルヴォア、カーヴェー、イムレイなどが訪問した時には實際にそのようなものがあつたのである。メルセーヌが旅した一八三〇年頃には、もはや緑色の鷺、青い蛇、鸚鵡、水牛が姿を消していたかもしれない。それは未開地を切開いた人間の責任であり、「アトラ」の作者のせいではない。しかも、シャトーブリアンが描こうとした自然は一八三〇年代のミシシッピーではなく、一七九一年のものでもない。彼自ら云つているごとくラ・サールやシャルルヴォア時代のミシシッピーなのである。従つてもしもシャトーブリアンのことを正しく批判したいとのぞむならば、まず十八世紀前半のミシシッピーの有様を再興してみなければならぬ。そしてこのためにはシャトーブリアンが参考にした旅行家たちに頼らねばならないことになる。その結果云い得ることは、もしもシャトーブリアンのテキストの中に誤ちがあるとするなら、その責任はシャトーブリアンが参考文献として使用した諸作品の著者にあるということである。

以上でプロローグにおける風景描寫の源泉比較は終り、つづいて「物語」に入るわけであるが、この中で主として問題となるのは第一章「獵帥」であり、ここに描かれているフロリダ地方の風光はもつぱらバートラムに負うていることは次に記す數カ所の比較で明白になし得るところである。

まずアラシュアの大草原についてのシャトーブリアンの描寫からはじめよう。

「この曠野は重なり合つた丘陵でとり巻かれていたが、それらの丘陵は段々高くなり、コパール椰子や、シトロン

や、泰山木や、柊のはえた森を雲までも聳えさせていた。」

バートラムはこれと同じ風光をほとんど同じような言葉で説明している。

「アラシュアの大草原は長さ一五マイル、圓周五〇マイル以上のみどりの平坦な平野である。それは動くような森と、豊かに生いしげつた地味の中に生長し、大きな花をつけた堂々たるマニョリアと、背の高い棕櫚の木によつて見下されているオレンヂの香高い繁みにつつまれた、段々をなした高い丘陵によつて取圍まれている」

Elle est environnée de coteaux, qui fuyant les uns derrière les autres, portent en s'élevant jusque dans les nues, des forêts étagées de copalmes, de citronniers, de magnolias et de pins rouges. (Atala)

The extensive Alachua savanna is a level green plain, above fifteen miles over, fifty miles in circumference..... (Barthlm)

インディアンに捕われたシャクタスは酋長の娘アトラに縄目を解いてもらい、二人で逃亡するのであるが、その時のことは「アトラ」の中で次のように書かれている。

「私はシマガンの娘を、大草原の中に岬のように突き出て、緑の入江のようになつてゐる岡の麓へ連れて行つた。曠野では、すべてがひつそりして、莊嚴そのものであつた。鶯は巢で鳴き、森には鶉の單調な歌聲や、おうむの鋭いなき聲や、野牛の吼え聲、シミノールの牝馬の嘶きがこだましていた。」

このところはバートラムが軽いタッチで素描した次の一文をさらにビトレストクに潤色したものに思われる。

「身輕な鹿の群、シミノールの馬の群 七面鳥、鋭い鳴き聲を出す用心深い鶴の片歩した群が、お互に幸福で、満足し合つて平和に生活を営んでいる。」

J'entraînai la fille de Simagnan au pied des coteaux qui formaient des golfes de verdure en avançant leurs promontoires dans la savane. Tout était calme, superbe, solitaire et mélancolique au désert. La grue des savanes criait debout sur son nid; les bois retentissaient du chant monotone des caillies, du sifflement des perruches, du mugissement des bisons, et du hennissement des cavales siminois.

(Atala)

Herds of sprightly deer, squadrons of the beautiful fleet Siminole horse, flocks of turkeys, civilized communities of the sonorous watchfull crane, mix together appearing happy and contented in the enjoyment of peace. (Bartram, p. 186)

つづいて戀し合うシヤクタスとアトラは美しい夜の森をさまようのである。

「夜はこよなく美しかつた。空氣の精が松の香のする彼女の青い頭髮をなびかせ、河邊のタマリンドの下にふせた鰐の放つ琥珀のほのかなにおいが漂つていた。月は一片の雲もない青空に輝き、その灰色の眞珠のような光は、かすんだ森の頂にふりそそいでいた。森の奥の方にきこえる故知れぬはるかな響のほかに、物音一つきこえなかつた。その響は、しじまの靈が、曠野の果てから果てまで息づいているかのようにであつた。」

この箇所では實際に觀察され感じられた何かが認められはしないだろうか。これは確かにシャトーブリアン自身がアメリカの原始林で經驗した美しい夜の思い出を筆にしたものに相違ない。シャトーブリアンはまた「アメリカ紀行」の中でナイヤガラ瀑布の近くで過した月光の夜の美しさを書いている。シナール教授は右の引用文もバートラムに負うているとし、バートラムの一文を掲げているが、その相似點はあまり明確ではないようである。

曠野を旅しながらシヤクタスとアトラとは日中の太陽をさけて西洋杉の苔の下に身を寄せるのである。

「フロリダではたいていの樹がそうであるが、中でも柏香樹と西洋杉とは白い苔に包まれていて、それが梢から地まで垂れ下つている。月の明るい夜など、立木のない大草原の上に苔の衣をまとつた一本の杉を見ると、長いかつぎをひきすつた幽霊だと思ふに達しない」

バートラムは、北緯三五度から回歸線にかけての至るところみられるこの苔 *Tillandsia usneoides* について書いている。

最後に今一つバートラムの影響を明瞭に指摘し得るものとしてケオ溪谷とスチコの村の敘景を引用しよう。

「とある岬を曲ると、ピラミッド型の墓や荒れ果てた小屋のあるスチコというインディアン部落が左手に現れた。また右手にケオの溪谷をやり過したが、同じ名の山の正面にはジョール族の小屋が點在していた。私たちを運び行く河は、高い斷崖の間を流れ、その盡きるところで落日が輝いていた。」

バートラムは次のように書いている。

「高い丘陵の上にスチコの古い町のすばらしい廢墟が現われた。そこにはインディアンのか大きな墓、または石塚と廣い物見臺があつた……これらの廢墟を離れると、溪谷と野原とは山の突起によつて分離されていた……私は谷の右岸に沿うて進んだ……高い山々が突然擴がり開くと、私は廣く肥沃なコオウの溪谷の入口を發見した……」さらにバートラムの細部にわたる描寫がつづき、次のようなものになる。「この非常に高い山々の頂に達して、私たちはすばらしい風光を楽しむことができた。ケオの甘美な溪谷、ジョールの山々の鋭い峯々、そしてはるかに遠くには同じ名の村、……ジョール山の豪放な岬はデナス河の兩岸にそそり立ち、泡立つ河水がその間を流れていた。」

On these towering hills appeared the ruins of the ancient famous town of Sticco. Here was a vast

Indian mount or tumult and great terrace; presently after leaving these ruins, the vale and fields are divided by means of a spur of the mountains pushing forward.....I followed the vale to the right hand...When the high mountains on each side suddenly receding, discovered the opening of the extensive and fruitful vale of Cove. (Bartram, 344) The vale is closed at Cove by a ridge of mighty hills, called the Jore mountain, said to be the highest land in the Cherokee country.....", (Bartram, p. 351) Having now attained the summit of this very elevated ridge we enjoyed a fine prospect inland; the enchanting Vale of Keowe, perhaps as celebrated for fertility, fruitfulness and beautiful prospects as the Fields of Pharsalia or the Vale of Tempe; the town, the elevated peaks of the Jore mountains, a very distant prospect of the Jore village.....the bold promontories of the Jore mountain stepping into the Tenase river, whilst his foaming waters rushed between them (Bartram, p. 353)

次に二人の戀人は森の嵐に遭遇するわけで、この場面の描寫もバートラムに負うものとされているが、實地に一つの言葉を比較してみることは殆んど不可能である。ただシャトーブリアンの「アメリカ紀行」に見出される嵐の場面が「アトラ」の素描として考えられるのであり、その描寫の出典は明らかにバートラムであるとシナール教授は述べているが、實際にその比較はしていない。このように間接的な影響をうけた原典を引出すことは非常に困難な問題であり、且間違いや行過ぎを引おこさないとも限らない。アメリカの自然を書いたある本をシャトーブリアンの文庫の中に見出したからとて、必ずしもシャトーブリアンがそれに眼を通していたとはかぎらない。ナイヤガラ瀑布や、フロリダの天然橋などについては多數の人が書いているから、それらのうちの一人を引合いに出すことは危険性が多いのであつて、ここでは以上の明確な源泉についてのみ記すにとどめる次第である。

源泉探求の目的はシャトーブリアンが以上引合いに出した諸作品のへうせつを行なつたということを主張するためではまづたくない。シャトーブリアンとしてはその短かい帶在中にミュスコギルジュ族や彼が北米を訪れた當時すでに絶えてしまつたナッチェズ族に關して、その地方の風土と同様、正確にして完璧な知識をつかみとることはできるはずがなかつたのである。シャトーブリアンがこれらの作品を参照し、使用したということは、彼の作品をより正確なものにしようとする彼の作家的良心によるものであるといわねばならない。しかも言葉の魔術師といわれるシャトーブリアンはその入念な仕上げによつて完璧なまでにこれらの源泉作品を消化し、自分の文章に統一しているのである。